



かなであん

〒249-0002 逗子市山の根1-7-24
Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

私たちが相続するもの

平成時代が終わっていこうとしていますが、皆さまにはどのような時代だったでしょうか。将来歴史で語られる「平成」は、決していい時代ではないかもしれません。それでもその時代に、子供たちは育ち、孫たちは生まれ、私たちは老いながらも生かされてきました。悲しいことの方が多く、望んでいるように、思うように、いかなのは時代のせいばかりではありません。それはいつの時代も我々人間が永遠に苦悩する問題です。苦難が起こることを完全に防ぐことはできませんが、その時になってうるたえることを少しでも軽くしてくれるもの、それが宗教であり、哲学や先人たちの歩んだ人生や言葉です。

* * *

平成時代は次々と大災害にみまわれ困難の方が多かった時代でしたが、より人間の根幹に関わる大きな問題は、少子、晩婚非婚、高齢化が急激に加速するのに対して、宗教を含めあらゆる分野が、市場原理主義の論理でしか向かい合っていないことではないでしょうか。

そんな時代に突入して半世紀が過ぎても、対策は改善前進されるどころか、ますますどのような状況にある人をも人間らしく「いのち」を全うし終えていけるということから逆行し、

普遍的なものが欠落しているように思えてなりません。それが、終活、お墓、相続などを問題視し踊らされている今の社会ではないかと思われます。

* * *

「相続」とは、土地や建物、預金や株などをさしていますが、受け継ぐものは、そのような形あるものばかりでしょうか。

貧しい寺で生まれ育った私は親から目に見えるものは何一つ相続しませんでした。しかし、ここにきて、親からはもとより多くの有縁の人々から実にさまざまなことを相続していたことに気づかされます。それは普通の日暮しをしてきた者にも恵まれていた「相続」です。

善くも悪くも、私の日々の立ち居振る舞い、行儀、言葉遣い、人との距離の保ち方、悔しまぎれの逃げ方でもありましたが、何よりその根底を流れる、親鸞聖人のみ教え「念仏相続」をいただいていたことは、価値ある相続であったと偲ばれます。

私のみならず、日本人が本来持っていたその感性が、逃れられない老・病・死や理不尽な大災害にも、自然に対する畏怖心、ひざまづく心を持って、恨むことなく、向かい合わせてくれたのではないかと思うのです。

の私に家内は躊躇せず告げてくれましたが、悲しみより、思い出を懐かしく楽しく回想し、一時苦しい闘病を忘れさせてくれました。最後に会ったのは、親友の生まれ育った京都河原町の小店で、末期ガンの彼が「お腹を温めなあかんねん」と熱燗を傾けていた姿はやっぱり粹でした。その熱燗をちびちび注ぎ合い、同病を労わりあったことは、ありがたいことでした。

またその日、「中学時代に歌った「オールド ブラック ジョー」が、今こそ味わえるという」という同年代の人の新聞投稿があったと家内が話してくれました。♪ われも往かんはや老いたれば かすかにわれを呼ぶ オールド ブラック ジョー ♪、奴隷として綿花畑を這い回る一生だった黒人たちが心のよりどころとした信仰より生まれた歌ですが、病室でそんな話をしたと、私の親友に家内が経過報告ついでに話すと、「呼び声を聞けることがすばらしいんだ」と応えてくれたそうです。

オールドブラックジョーは、まさに「善知識」の味わいです。「いい所だから早く来い」と大声で叫ぶのではなく、かすかに「大丈夫だよ」と呼んでくれる声を聞き取り、そちらに向かって歩むのが念仏者の相続です。

奏庵年末法座

日時

12月26日(水)

午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとき

本年も年末法座を迎えることができますこと、奏庵にお心をお寄せいただく皆さまのおかげと心より御礼申し上げます。築地本願寺の布教所として平成と共に歩んできた奏庵はご縁をいただいた方々と同じ年を重ねてまいりました。その道のりを共にして下さった中にはすでに仏さまになられた方々もおられますが、確かに次世代へと繋ぐはたらきをして下さっていること、ありがたく偲ばれます。一年の締めくくりです。

どうぞお参り下さい。

2019年度 年忌法要

1周忌	平成30年
3回忌	29年
7回忌	25年
13回忌	19年
17回忌	15年
23回忌	9年
27回忌	5年
(25回忌は23回忌または27回忌によせて勤められる場合もあります)	
33回忌	昭和62年
50回忌	45年

ご法事は、亡き方々をご縁に勤められることから「亡き人のため」に勤めてあげていると思いがちです。浄土真宗のみ教えでは、これまでも繰り返しお話しさせていただいておりますように、亡くなられた方々は、如来のお救いによってお浄土に参られています。その方々を「仏」としてお迎えすることから、仏事、ご法事は始まります。

私たちに、亡き人に善を振り向ける追善も、先祖供養をするようなはたらきはできません。反対に仏となられた方々が「あなたのことだよ」と願ってはたらいて下さっていることに気づき、またご法事の場に参集した一人ひとりが、亡き人がそのいのちでお示し下さっていることを「我が事」として受けとめ、味わってこそ、仏の願いでありご法事が結ぶ仏縁なのです。

上記の表は、あくまでお勤めする目安です。ご自身やご家族が大変な時に重なるときもあるでしょう。遅い早いにこだわらず、安心して仏さまを偲べる日にお勤めいただきますよう、ご

はからずも入院生活は三月に亘り、今三つ目の病院のベッドにいる。その間に季節も移り変わったはずだが、高層ビルに囲まれた17階の病室から眺める大都会は無音で、季節の肌感覚のない不思議な感覚だ。■一つ目は救急搬送された病院での約40日、転院する日に外に出て、初めて自分の命を預けていた所がどんなであったかを知った。それまでのどこかわからない所で「危ない、危ない」と言われていた不安感は、かつて経験したことのなかったものだった。

■やっといつも世話になっている虎ノ門病院に転院が叶って、何も好転した訳ではないのに安堵したのもつかの間、「この施術にはここより……」と他の病院を薦められた時には、そんなに難しいのかと絶望しそうだったが、癌治療の主治医の先生が海外学会から戻ったと病室に訪ねて下さり「痩せちゃったけど目が生きてます。大丈夫ですよ」と送り出してくれた。■そして今、三つ目の東京医大病院で手術を終え、何をどうしてどうなったのか自覚のないお任せのまま、我を苦しめていた腹の中の何者かがなくなっていくのが感じられるようになっていく。その執刀医の術前の言葉も「大丈夫ですよ」だった。■不安でいる者への「大丈夫ですよ」という言葉の力ははかりしれなく大きい。たとえそれで結果が思うようにいかなくとも、最後に聞いた言葉が「大丈夫ですよ」であることの安らぎ。我がはからいであることも、してあげることもできない私に、ご縁のあった多くの仏が、「大丈夫ですよ」と言ってくれていることをしみじみ味わう平成の終わりとなった。病室より

